学童野球で上越勢初の県制覇、大潟フェニックス

強力打線がさく裂し、上越勢県勢の深制覇を果たした大潟フェニックスのメンバー（8月30日、長岡市悠久山球場、提供写真）

2016 スポーツ名場面回顧〈下〉

上越地区の少年野球チーム「大潟フェニックス」が上越勢として初の県制覇を果たした。同市の学童野球40年超の歴史にとっても、悲願を成し遂げた瞬間だった。8月の第38回読売少年野球県大会で、6月の県大会で敗れていた相手に雪辱し、決勝でも同様の打線が火を噴き、頂点に立った。低学年の時から育成してきた選手たちがまとまり、全員の力で手にした栄冠だった。

「打って勝つ」体現

全員野球で栄冠つかむ

「スター選手はいない。全員の力を結集して挑むチーム。今年の6年生は低学年のときからレギュラーとして上がってきた。右投手2人は中学でも投手を続けてほしい」

と、就任7年目の川畑敏哲監督（45）は6月の快挙を振り返る。

昨年の6年生が3人しかいなかったことも あり、今年の6年生7人は中学から野球を続けてほしかった。狙っていた世代の新人戦で優勝を逃し、今年は切り替え、地道に練習した。上越市新井球場開催初の大会となる5月の上越スポーツ協会長杯争奪大会で力を発揮、決勝で中郷ジュニア（妙高市）を破り初優勝を果たした。

続く上越支部大会も突破し、6月の関甲信越選抜武野球大会（マクドナルド・トーナメント）準決勝に初出場した。「同じリーグフェニックスでも戦っていた」という因縁の五泉フェニックス（五泉市）に大回二死2点で大逆転勝ち。翌決勝で巻南堀団野球クラブ（新潟市）と対戦した。

2年前の新人県大会で敗れていた相手で、その時とほぼ同じメンバーは約束していないい。敗れた瞬間から、「次の県大会でリベンジしよう」と全員で誓った。試合では、主砲で4番の川畑大雅（6年）が先行を許え、7回と逆心の勝ちを呼んだ。「うちがよく打つて、向こうにスピード投球をやらせなかった」と約束の投球を振り返る。

続く、決勝の相手は、同じ上越市勢の高志（高志町）との決勝も準決勝の延長の取り合いから、二回に勝ち越しを6-4と制し、上越勢初の県制覇を果たした。

成績を残した10月の松川雅堂旅当新人大会では石川の投球、守備はベースボールクラブに継承し、県外勢相手にも手応えをつかんだ。ただ、チームの課題は変わらない。「どんなに苦しくても、勝てなかった時の悔しさが全て。勝負に強く、初心を忘れずにやっていきたい」と話す。

石川投手は肘のけがもあり、上手な投手に変え、より厳の回転を使って投げられるようになった。巻頭堀団にリベンジした試合では、「ストライクを投げるように、スタミナは初戦で、対抗心を燃やした昨秋の新人戦で優勝を掲げられ、1-3で敗戦した。巻頭堀団との組やった活躍は同じメンバー。準決勝で、1-3で敗戦した。巻頭堀団との組合わせに、四回に勝ち越し、六回には5点を打越し、六回には5点を打を集中して突き放す。計12安打を浴びせ、左腕エースの川大回（六郷町6年）が完投勝利を飾った。

「うちの野球をやらせてもらえなかった」と圧倒された。

同投手は、上越市勢19年ぶりの3回にもメンバーは納得していない。「次の県大会でリベンジしよう」と全員で誓った。試合では、主砲で4番の川畑大雅（6年）が先行を許え、7回と逆心の勝ちを呼んだ。「うちがよく打つて、向こうにスピード投球をやらせなかった」と約束の投球を振り返る。

続く、決勝の相手は、同じ上越市勢の高志（高志町）との決勝も準決勝の延長の取り合いから、二回に勝ち越しを6-4と制し、上越勢初の県制覇を果たした